

---

# ミソラ

千葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミソラ

### 【Nコード】

N1450W

### 【作者名】

千葉

### 【あらすじ】

ほんじつはせいてんなり

全てが不可思議だった。空は青い。所々に雲が浮かんでいるが、基本的には晴天である。私の部屋は2階の角にある。階上に住んでいる人間のことはよく知らない。足音などはほとんど聞こえないが、夜になると風呂があるはずの場所の天上の向こうから水音が聞こえてくるので、誰かが住んでいることは確かである。6畳の狭い部屋。ベランダに出て下の通りを見下ろすと、大抵いつも猫が歩いていたり黒い猫。茶色い猫。恐らく駐輪場の辺りに住んでいるのだろう。階下に住んでいる人間のこともよく知らない。先日郵便受けの所で出くわした、明るい髪の女が住んでいることは知っている。しかしその容姿しか知らない。一番よく知っているのは、やはり隣人のことだった。彼は作家を志していた。背が高く、骨と皮だけのように細い体をしている。髪も眼も黒い。薄い唇は、いつも気難しそうに真一文字に結ばれていた。彼はほとんど外に出ている様子が無かった。私も自分の部屋を仕事場に使っているためあまり出かける方ではないのだが、少なくとも私が在宅の間は常に生活の匂いが壁の向こうから染みだしていた。彼と私は友人関係であった。週に一度は必ず、私は彼の部屋を訪れる。そうして最近仕事の程はどうだなどと少しばかり話をし、私の持ち込んだものと彼の部屋にある食糧とで簡単な食事を摂り、酒を飲んだ。昨夜も私は彼の部屋を訪れた。彼は私の持参した安物の赤ワインを舌で転がしながら、ふと思いついたように私の方を見て言った。

「そつえば俺は、しばらくこの部屋を空けようと思っている」

「珍しいな、旅行か？」

先にも述べたが、彼はあまり外に出る方ではない。少なからず驚嘆しながら私が彼に問うと、彼は適切な言葉を探すように首を左へ傾げた。眼の下には暗い隈が濃く刻まれていた。

「空は青く、所々に雲が浮かんでいるが、基本的には晴天であるような美空の下を、俺はもう長いこと歩いていない。俺は太陽が嫌いなんだ。しかしそんな生活は全く人間らしくない。俺は人間らしくありたい。俺は人間に読まれるものを書きたいからだ」

彼は黒い眼を赤ワインに向けながらそう言った。私は彼の言葉を聞きながら、やはり驚きを隠せずにいた。私の知る彼は、およそ人間らしさとはかけ離れていた。空や雲の温かみを求めるような人間らしさとは、とても結び付かないような男のはずだった。私はろくな返答も出来ぬまま、グラスに残っていたワインに口をつけた。安味がした。

次の日、確かに彼は出かけて行った。よく晴れた午前7時だった。彼が部屋を出て行く気配を察知した私は、ベランダへ出て下の通りを見下ろした。彼がその道を通る保証はなかった。通りには猫が居た。黒い猫が電柱の影に蹲っていた。人間は居なかった。猫は蹲ったまま動かなかった。私は動くものの居ないコンクリート上を見下ろしながら、彼が部屋の扉を開け、晴天の下にその身を晒している所を想像した。酷い違和感だった。やがて視界の隅に黒い塊が映った。彼だった。陽に当たっていない為に色が抜け白くなった肌を、その髪や眼と同じ黒色のシャツで包んでいた。美空の下、コンクリートの上を歩く彼は酷く異物だった。彼は通りをゆっくりとした足取りで歩いた。そして猫の前を通りがかった。猫は僅かに身じろぎし、彼の方を見た、ような気がした。何せ私は2階に居るので、そ

これまで細かい所は確認出来ない。彼も猫に一瞥をくれた。私はそれを階上から見ている。両者の間にはそれ以上何も生まれなかった。彼は視線を前途に戻し、猫の前を通り過ぎた。そうしてやがて、彼は私の視界から消えた。

私は昨晚、彼の部屋を出るときその合鍵を預かっていた。彼は私に、「俺の居ない間、勝手に部屋に入って良いから、俺の書いた物を読んでみて欲しい。机の上に全て置いてある。」と言いついて残していた。私はこれまで彼の書いたものを読んだことがなかった。私は濃く淹れたブラックコーヒーとトーストで朝食を摂った。それから私は少し自分の仕事に手を付け、10時を少し回った所で部屋を出た。そうして、私の出てきた扉のすぐ横に聳える彼の部屋の扉と対峙した。預かっていた合鍵を穴に差し込み、右に捻ると確かに錠が開いた。部屋の中は綺麗に片付いていた。古びた机が部屋の隅にあった。何冊かのノートと、数十枚の原稿用紙が積んであった。私は一番上にあつた原稿用紙に手を伸ばした。神経質そうな細かい文字が並んでいた。

二週間経つても彼は部屋へ帰ってこなかった。私は今日もブラックコーヒーとトーストで朝食を摂った。今日も下の通りには猫が居る。今日は灰色の猫だった。彼が綴った幾編かの物語は、いずれも広義に於いて愛の物語であつた。非常に人間らしい温かみに溢れた話であつた。猫は死ぬとき家を出る。今日も空は青かつた。基本的には晴天、であつた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1450w/>

---

ミソラ

2011年10月7日23時31分発行